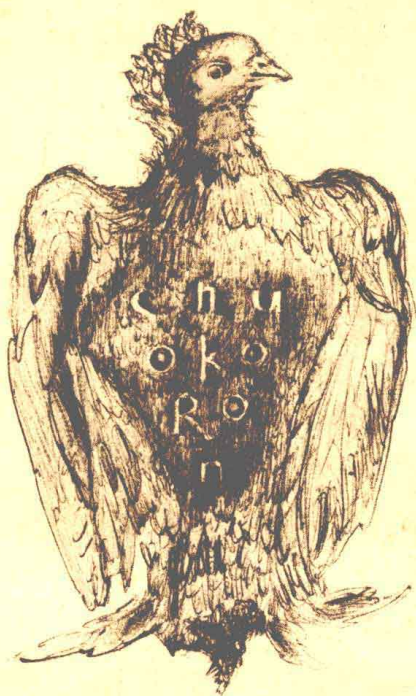




鍵

谷崎潤一郎 著

鍵

谷崎潤一郎著



中央公論社

鍵

普及版

昭和三十三年十二月十日 初版
昭和三十四年六月二十五日 十三版

著者 谷崎潤一郎

板畫 棟方志功

發行者 栗本和夫

印刷者 高橋武夫

發行所 中央公論社

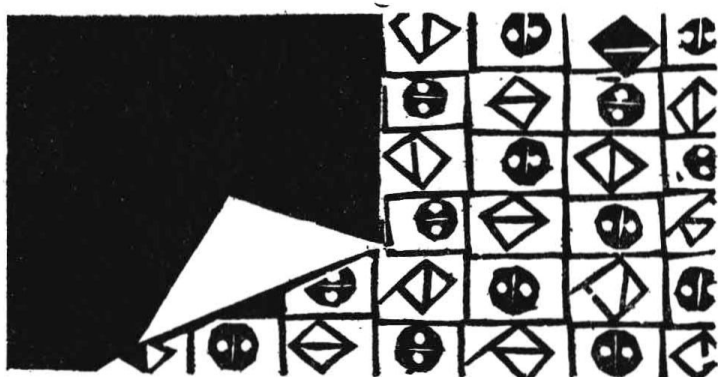
東京都中央區京橋二丁目一番地
電話(56)五三番 振替東京三番
〈大日本印刷・毛利製本〉



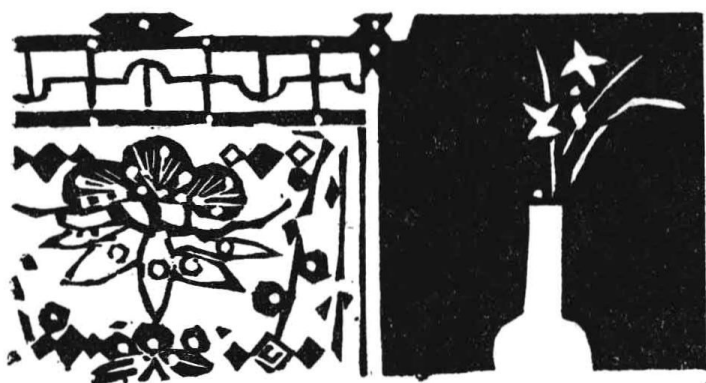
定價 一三〇圓

鍵

一月一日。……僕ハ今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテキタヤウナ事柄ヲモ、敢テ書キ留メルコニシタ。僕ハ自分ノ性生活ニ關スルコト、自分ト妻トノ關係ニツイテハ、アマリ詳細ナコトハ書カナイヤウニシテ來タ。ソレハ妻ガ此ノ日記帳ヲ秘カニ讀ンデ腹ヲ立テハシナイカト云フコトヲ恐レテキタカラデアツタガ、今年カラハソレヲ恐レヌコトニシタ。妻ハ此ノ日記帳ガ書齋ノ何處ノ抽出ニ這入ツテキルカヲ知ツテキルニ違ヒナイ。古風ナ京都ノ舊家ニ生レ封建的ナ空氣ノ中ニ育ツタ彼女ハ、今日モナホ時代オクレナ舊道徳ヲ重ンズル一面ガアリ、或ル場合ニ



ハソレヲ誇リトスル傾向モアルノデ、マサカ夫ノ日
 記帳ヲ盗ミ讀ムヤウナリハシサウモナイケレドモ、
 シカシ必ズシモサウトハ限ラナイ理由モアル。今後
 從來ノ例ヲ破ツテ夫婦生活ニ關スル記載ガ頻繁ニ現
 ハレルヤウニナレバ、果シテ彼女ハ夫ノ秘密ヲ探ラ
 ウトスル誘惑ニ打チ勝チ得ルデアラウカ。彼女ハ生
 レツキ陰性デ、秘密ヲ好ム癖ガアルノダ。彼女ハ知
 ツテキルコトデモ知ラナイ風ヲ装ヒ、心ニアルコト容
 易ニ口ニ出サナイノガ常デアルガ、惡イコトニハソ
 レヲ女ノ嗜ミデアルトモ思ツテキル。僕ハ、日記帳
 ヲ入レテアル抽出ノ鍵ハイツモ某所ニ隠シテアルノ
 ダガ、ソシテ時々ソノ隠シ場所ヲ變ヘテキルノダガ、
 詮索好キノ彼女ハ事ニ依ルト過去ノアラユル隠シ場
 所ヲ知ツテシマツテキルカモ知レナイ。尤モソシナ



面倒ヲシナイデモ、アンナ鍵ハ幾ラデモ合ヒ鍵ヲ求
メルヲガ出来ヨウ。……僕ハ今「今年カラハ讀マレ
ルヲ恐レヌヲニシタ」ト云ツタガ、考ヘテ見ルト、
實ハ前カラソシナニ恐レテハキナカツタノカモ知レ
ナイ。ムシロ内々讀マレルヲ覺悟シ、期待シテキ
タノカモ知レナイ。ソレナラバナゼ抽出ニ鍵ヲ懸ケ
タリ又ソノ鍵ヲ彼方此方へ隠シタリシタノカ。ソレ
ハ或ハ彼女ノ搜索癖ヲ満足サセルタメデアツタカモ
知レナイ。ソレニ彼女ハ、モシ僕ガ日記帳ヲ故意ニ
彼女ノ眼ニ觸レ易イ所ニ置ケバ、「コレハ私ニ讀マセ
ルタメニ書イタ日記ダ」ト思ヒ、書イテアルヲ信
用シナイカモ知レナイ。ソレドコロカ、「ホシタウノ
日記ガモウ一ツ何處カニ隠シテアルノダ」ト思フカ
モ知レナイ。……

郁子ヨ、ワガ愛スルイトシノ妻ヨ、
3

僕ハオ前ガ果シテ此ノ日記ヲ盜ミ讀ミシツ、アルカドウカヲ知ラナイ。僕ガオ前ニソソナリヲ聞イテモ、オ前ハ「人ノ書イタモノヲ盜ミ讀ミナド致シマセン」ト答ヘルニキマツテキルカラ、聞イタトコロデ仕方ガナイ。ダガモシ讀ンデキルノデアツタラ、決シテコレハ偽リノ日記デナイヲ、此ノ記載ハスベテ眞實デアリヲ信ジテ欲シイ。イヤ、疑ヒ深い人ニ向ツテカウ云フヲ云フト却ツテ疑ヒヲ深クサセル結果ニナルカラ、モウ云フマイ。ソレヨリ此ノ日記ヲ讀ンデサヘクレ、バソノ内容ニ虚偽ガアルカ否カハ自然明カニナルデアラウ。

モトヨリ僕ハ彼女ニ都合ノヨイヲバカリハ書カナイ。彼女ガ不快ヲ感ズルデアラウヤウナリ、彼女ノ耳ニ痛イヤウナリモ憚カラズ書イテ行カネバナラナイ。モト／＼僕ガカウ云フヲ書ク氣ニナツタノハ、彼女ノアマリナ秘密主義、——夫婦ノ間デ閨房ノヲ語リ合フサヘ恥ヅベキヲトシテ聞キタガラズ、タマ／＼僕ガ猥談メイタ話ヲシカケルト忽チ耳ヲ蔽ウテシマフ彼女ノ所謂「身嗜ミ」、アノ偽善的ナ「女ラシサ」、アノ態トラシイオ上品趣味ガ原因ナノダ。連レ添ウテ二十何年ニモナリ、嫁入り前ノ娘サヘアル身デアリナガラ、寢床ニ這入ツテモ未ダニタマ

黙々ト事ヲ行フダケデ、ツヒゾシンミリトシタ睦言ヲ取り交サウトシナイノハ、ソレデモ夫婦ト云ヘルデアラウカ。僕ハ彼女ト直接閨房ノヲ語り合フ機會ヲ與ヘラレナイ不滿ニ堪ヘカネテコレヲ書ク氣ニナツタノダ。今後ハ僕ハ、彼女ガコレヲ實際ニ盜ミ讀ミシテキルト否トニ拘ハラズ、シテキルモノト考ヘテ、間接ニ彼女ニ話シカケル氣持デ此ノ日記ヲツケル。

何ヨリモ、僕ガ彼女ヲ心カラ愛シテキルヲ、——此ノヲハ前ニモ度々書イテキルガ、ソレハ僞リノナイヲデ、彼女ニモヨク分ツテキルト思フ。タゞ僕ハ生理的ニ彼女ノヤウニアノ方ノ慾望ガ旺盛デナク、ソノ點デ彼女ト太刀打ち出來ナイ。僕ハ今年五十六歳（彼女ハ四十五ニナツタ筈ダ）ダカラマダソナニ衰ヘル年デハナイノダガ、ドウ云フ譯カ僕ハアノヲニハ疲レ易クナツテキル。正直ニ云ツテ、現在ノ僕ハ週ニ一回クラキ、——ムシロ十日ニ一回クラキガ適當ナノダ。トコロガ彼女ハ（コンナヲヲ露骨ニ書イタリ話シタリスルヲヲ彼女ハ最モ忌ムノデアル）腺病質デ而モ心臟ガ弱イニモ拘ハラズ、アノ方ハ病的ニ強イ。サシアタリ僕ガ甚ダ當惑シ、參ツテキルノハ、此ノ一事ナノダ。僕ハ夫トシテ、彼女ニ十分ノ義務

ヲ果タシ得ナイノハ申譯ガナイケレドモ、サウカト云ツテ、彼女ガソノ不足ヲ補フタメニ、モシ假リニ、——コンナヲ云フト、私ヲソソナミダラナ女ト思フノデスカト怒ルデアラウガ、コレハ「假リニ」ダ、——他ノ男ヲ拵ヘタトスルト、僕ハソレニハ堪ヘラレナイ。僕ハソソナ假定ヲ想像シタバケデモ嫉妬ヲ感ズル。ノミナラズ彼女自身ノ健康ノヲ考ヘテモ、アノ病的ナ慾求ニ幾分ノ制御ヲ加ヘタ方ガヨイノデハアルマイカ。……僕ガ困ツテキルノハ、僕ノ體力ガ年々衰ヘラ増シツツアルヲダ。近頃ノ僕ハ性交ノ後デ實ニ非常ナ疲勞ヲ覺エル。ソノ日一日グツタリトシテ物ヲ考ヘル氣力モナイクラキニ。……ソレナラ僕ハ彼女トノ性交ヲ嫌ツテキルノカト云フト、事實ハソレノ反對ナノダ。僕ハ義務ノ觀念カラ強ヒテ情慾ヲ驅リ立テ、イヤ／＼彼女ノ要求ニ應ジテキルノデハ斷ジテナイ。僕ハ幸カ不幸カ彼女ヲ熱愛シテキル。コ、デ僕ハ、イヨイヨ彼女ノ忌避ニ觸レル一點ヲ發カネバナラナイガ、彼女ニハ彼女自身全ク氣ガ付イテキナイトコロノ或ル獨得ナ長所ガアル。僕ガモシ過去ニ、彼女以外ノ種々ノ女ト交渉ヲ持ツタ經驗ガナカツタナラバ、彼女ダケニ備ハツテキルアノ長所ヲ長所ト知ラズニキルデモアラウ



ガ、若カリシ頃ニ遊ビヲシタヲノアル
僕ハ、彼女ガ多クノ女性ノ中デモ極メ
テ稀ニシカナイ器具ノ所有者デアルヲ
ヲ知ツテキル。彼女ガモシ昔ノ島原ノ
ヤウナ妓樓ニ賣ラレテキタトシタラ、
必ズヤ世間ノ評判ニナリ、無數ノ嫖客
ガ競ツテ彼女ノ周圍ニ集マリ、天下ノ
男子ハ悉ク彼女ニ惱殺サレタカモ知レ
ナイ。(僕ハコンナヲ彼女ニ知ラセナ
イ方ガヨイカモ知レナイ。彼女ニサウ
云フ自覺ヲ與ヘルヲハ、少クトモ僕自
身ノタメニ不利カモ知レナイ。シカシ
彼女ハコレヲ聞イテ、果シテ自ラ喜ブ
デアラウカ耻デルデアラウカ、或ハ又
?

侮辱ヲ感ジルデアラウカ。多分表面ハ怒ツテ見セナガラ、内心ハ得意ニ感ジルヲ禁ジ得ナイノデハナカラウカ。僕ハ彼女ノアノ長所ヲ考ヘタバケデモ嫉妬ヲ感ズル。モシモ僕以外ノ男性ガ彼女ノアノ長所ヲ知ツタナラバ、ソシテ僕ガソノ天與ノ幸運ニ十分酬イテキナイヲ知ツタナラバ、ドンナヲ起ルデアラウカ。僕ハソレヲ考ヘルト不安デモアリ、彼女ニ罪深イヲシテキルトモ思ヒ、自責ノ念ニ堪ヘラレナクナル。ソコデ僕ハイロイロナ方法デ自分ヲ刺戟シヨウトスル。タトヘバ僕ハ僕ノ性慾點——僕ハ眼ヲツブツテ眼瞼ノ上ヲ接吻シテ貰フ時ニ快感ヲ覺エル、——ヲ彼女ニ刺戟シテ貰フ。又反對ニ僕ガ彼女ノ性慾點——彼女ハ腋ノ下ヲ接吻シテ貰フヲ好ムノデアル、——ヲ刺戟シテ、ソレニ依ツテ自分ヲ刺戟シヨウトスル。然ルニ彼女ハソノ要求ニサヘアマリ快クハ應ジテクレナイ。彼女ハサウ云フ「不自然ナ遊戲」ニ耽ルヲ欲セズ、飽クマデモオーソドックスナ正攻法ヲ要求スル。正攻法ニ到達スル手段トシテノ遊戲デアルヲ説明シテモ、彼女ハコ、デモ「女ラシイ身嗜ミ」ヲ固守シテソレニ反スル行爲ヲ嫌フ。彼女ハ又僕ガ足ノ *fetishist* デアルヲ知ツテキナガラ、且彼女ハ自分ガ異常ニ形ノ美シ

イ足（ソレハ四十五歳ノ女ノ足ノヤウニハ思ヘナイ）ノ所有者デアルヲ知ツテ
キナガラ、イヤ知ツテキルガ故ニ、メツタニソノ足ヲ僕ニ見セヨウトシナイ。眞
夏ノ暑イ盛リデモ彼女ハ大概足袋ヲ穿イテキル。セメテソノ足ノ甲ニ接吻サセテ
クレト云ツテモ、マア汚イトカ、コンナ所ニ觸ルモノデハアリマセントカ云ツテ、
ナカナカ願ヒヲ聽イテクレナイ。ソレヤコレヤデ僕ハ一層手ノ施シヤウガナクナ
ル。……正月早々愚痴ヲナラベル結果ニナツテ僕モイサ、カ耻カシイガ、デモコ
ンナヲモ書イテオク方ガヨイト思フ。明日ノ晩ハ「ヒメハジメ」デアル。オーソ
ドックスヲ好ム彼女ハ毎年ノ吉例ニ従ヒ、必ズソノ行事ヲ嚴肅ニ行ハナケレバ承
知シナイデアラウ。……

一月四日。……今日私は珍しい事件に出遇つた。三ケ日の間書齋の掃除をしなかつたので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入つたら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載つてゐる書棚の前に鍵が落ちてゐた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、たゞ不用意にあ

の鍵をあんな風に落しておいたとは考へられない。夫は實に用心深い人なのだから。そして長年の間毎日日記をつけてゐながら、嘗て一度もあの鍵を落したことなくなかつたのだから。……私は勿論夫が日記をつけてゐることも、その日記帳をあの小机の抽出に入れて鍵をかけてゐることも、そしてその鍵を時としては書棚のいろ／＼な書物の間に、時としては床の絨緞の下に隠してゐることも、とうの昔から知つてゐる。しかし私は知つてよいことゝ知つてはならないことゝの區別は知つてゐる。私が知つてゐるのはあの日記帳の所在と、鍵の隠し場所だけである。決して私は日記帳の中を開けて見たりなんかしたことはない。だのに心外なことには、生來疑ひ深い夫はわざ／＼あれに鍵をかけたなりその鍵を隠したりしなければ、安心がならなかつたのであるらしい。……その夫が今日その鍵をあんな所に落して行つたのはなぜであらうか。何か心境の變化が起つて、私に日記を讀ませる必要を生じたのであらうか。そして、正面から私に讀めと云つても讀まうとしないであらうことを察して、「讀みなければ内證で讀め、こゝに鍵がある」と云つてゐるのではなからうか。さうだとすれば、夫は私がとうの昔から鍵の所

在を知つてゐたことを、知らずにゐたと云ふことになるのだらうか？ いや、さうではなく、「お前が内證で讀むことを僕も今日から内證で認める、認めて認めないふりをしてゐてやる」と云ふのだらうか？……

まあそんなことはどうでもよい。かりにさうであつたとしても、私は決して讀みはしない。私は自分でこゝまでと極めてゐる限界を越えて、夫の心理の中にまで這入り込んで行きたくない。私は自分の心の中を人に知らせることを好まないやうに、人の心の奥底を根掘り葉掘りすることを好まない。ましてあの日記帳を私に讀ませたがつてゐるとすれば、その内容には虚偽があるかも知れないし、どうせ私に愉快なことばかり書いてある筈はないのだから。夫は何とでも好きなことを書いたり思つたりするがよいし、私は私でさうするであらう。實は私も、今年から日記をつけ始めてゐる。私のやうに心を他人に語らない者は、せめて自身に向つて語つて聞かせる必要がある。但し私は自分が日記をつけてゐることを夫に感づかれるやうなへまはやらない。私はこの日記を、夫の留守の時を窺つて書き、絶対に夫が思ひつかない或る場所に隠しておくことにする。私がこれを書

く氣になつた第一の理由は、私には夫の日記帳の所在が分つてゐるのに、夫は私
が日記をつけてゐることさへも知らずにゐる、その優越感がこの上もなく楽しい
からである。……

一昨夜は年の始めの行事をした。……あゝ、こんなことを筆にすると何と云ふ
耻かしさであらう。亡くなつた父は昔よく「慎^{ひとりをうしむ}獨」と云ふことを教へた。私が
こんなことを書くのを知つたら、どんなにか私の墮落を歎くであらう。……夫は
例に依り歡喜の頂天に達したらしいが、私は又例に依り物足りなかつた。そして
その後の感じが溜らなく不快であつた。夫は彼の體力が續かないのを耻ぢ、私に
濟まないと云ふことを毎度口にする半面、夫に對して私が冷靜過ぎることを攻撃
する。その冷靜と云ふ意味は、彼の言葉に従へば私は「精力絶倫」で、その方面
では病的に強いけれども、私のやり方は餘りにも「事務的」で、「ありきたり」で、
「第一公式」で、變化がないと云ふのである。平素何事につけても消極的で、控へ
目である私が、あのことにだけは積極的であるにも拘はらず、二十年來常に同じ
メソッド、同じ姿勢でしか應じてくれないと云ふのである。——そのくせ夫はい

つも私の無言の挑みを見逃さず、私の示すほんの僅かな意志表示にも敏感で、直ちにそれと察するのである。それは或は、私の頻繁過ぎる要求に絶えず戦々兢兢としてゐる結果、却つてそんな風になるのかも知れない。——私は實利一點張りで、情味がないのださうである。僕がお前を愛してゐる半分も、お前は僕を愛してゐないと、夫は云ふ。お前は僕を單なる必要品としか、——それも極めて不完全な必要品としか考へてゐない、お前がほんたうに僕を愛してゐるなら、もつと熱情があつてもよい筈だ、いかなる僕の注文にも應じてくれる筈だと云ふ。僕が十分にお前を満足させ得ない一半の責めはお前にある、お前がもつと僕の熱情をかき立てるやうにしてくれれば、僕だつてこんなに無力ではない、お前は一向さう云ふ努力をしようとせず、自ら進んでその仕事に僕と協力してくれない、お前は食ひしんばうの癖に手を拱いて据ゑ膳の箸を取ることばかり考へてゐると云ひ、私を冷血動物で意地の悪い女だとさへ云ふ。

夫が私をさう云ふ眼で見るのも一往無理のないところがある。だけど私は、女と云ふものはどんな場合にも受け身であるべきもの、男に對して自分の方から能動

的に働きかけてはならないもの、と云ふ風に、昔氣質の親たちからしつけられて來たのである。私は決して熱情がない譯ではないが、私の場合、その熱情は内部に深く沈潜する性質のもので、外に發散しないのである。強ひて發散させようとすればその瞬間に消えてなくなつてしまふのである。私ののは青白い熱情で、燃え上る熱情ではないと云ふことを、夫は理解してくれない。……この頃になつて私がつく／＼感じることは、私と彼とは間違つて夫婦になつたのではなかつたか、と云ふことである。私にはもつと適した相手があつたであらうし、彼にもさうであつたらうと思ふ。私と彼とは、性的嗜好が反撥し合つてゐる點が、餘りにも多い。私は父母の命ずるまゝに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはかう云ふものと思つて過して來たけれども、今から考へると、私は自分に最も性の合はない人を選んだらしい。これが定められた夫であると思ふから仕方なく忪へてゐるものゝ、私は時々彼に面と向つて見て、何と云ふ理由もなしに胸がムカムカして來ることがある。さう、そのムカムカする感じは、昨今に始まつたことではなく、そもそも結婚の第一夜、彼と褥を共にしたあの晩からさうであつた。あの遠い昔の新婚旅